

第68回けんこう教室開催レポート

10月19日(土)に当院研究棟2階の大会議室で第68回けんこう教室を開催し、夜半からの雨が残る中、65名の方にお集まりいただきました。今回は皮膚科の市村洋平医師(国際医療福祉大学病院助教)が「皮膚がんってどんな症状なの???-皮膚がんの早期発見について-」というテーマで講演を行いました。

初めに、皮膚科の受診傾向について、皮膚のできものやほくろについて、自分で、あるいは家族や他人に指摘されたり、気付いていても市販薬を塗っているが治らない、徐々におおきくなってきた、患部から血が出てくるようになった等の理由でかかる方が多いという紹介がありました。

皮膚がんの早期発見は、皮膚に生じる異常や皮膚がんの兆候をいかに早く気付いてもらうかが重要です。実際に症例を画像で示して、「どれが皮膚がんでしょうか」と来場者への質問から始まりました。スクリーンに示された4つの写真はそれぞれ特徴の違うもので、皮膚がんと言ってもいくつか種類があって特徴が違うということがわかりました。

その後、皮膚がんではない、脂漏性角化症、日光角化症等の紹介があり、原因や特徴、液体ちっ素、切除、外用薬(付け薬)等による治療方法が紹介されました。



市村 洋平医師 国際医療福祉大学 病院助教

続いて主題である皮膚がんの紹介に入りました。ボーエン病は表皮内がんのひとつで紫外線による皮膚へのダメージが原因と考えられ、境界がくっきりした紅褐色から黒褐色のしみが特徴です。有棘細胞癌(ゆうきょくさいぼうがん)も紫外線による皮膚のダメージが原因と考えられ、次第に拡大して腫瘤を作り、カリフラワーのような外観を呈するものです。基底細胞がんは高齢者の顔面、特に中心部によく発生し、腫瘍の中央部が潰瘍化することもあるが転移することはまれな皮膚がんです。

悪性黒色腫はメラノーマとしても知られる皮膚の悪性腫瘍で、おでき様、ほくろ様の見た目が黒色で縁取りが不整で色むらがある皮膚がんです。ほくろやしみに◇不規則なかたち◇境界が不鮮明◇色むらがある◇大きくなる◇かたちが変わる等の所見には注意が必要です。この悪性黒色腫は遠隔転移を伴うことが多く、予後が悪いので早期発見が非常に大事な疾患だということです。悪性黒色腫の治療は腫瘍切除+リンパ節郭清(切除)や抗腫瘍薬(抗がん剤)がありますが強度の治療が必要になる場合があるとのことでした。

講演の終わりに特に覚えておいてほしいこととして、長期間治療しているにも関わらず変化がみられないしっしん、だんだんおおきくなってきたできもの、色の変化がみられるようになったほくろ、出血するようになったできもの、このような症状がみられる場合には、皮膚科を受診してください。というアドバイスが市村講師からありました。

講演後には、小澤 秀崇 理学療法士がリハビリ体操を実演しました。今回は足や臀部を中心とした運動でした。高齢の方でも運動習慣があると寝たきりになるケースが比較的少ないとのこと。参加者は、自分の体力に応じて、体力のない方は過度な負担がかからないように椅子を支えにするなどして、熱心に取り組まれていました。



小澤 秀崇 理学療法士による体操

○次回の第69回けんこう教室は、11月2日(土) 10:30~11:30

口から安全に食事を摂る仕組みと「口から安全に食事が摂れなくなった時どうするか」
講師 稲田 晴生医師 (いなだ はるお) リハビリテーション科 を予定しています。